

<書評論文>

親族関係からみた社会的交換の地域における多様性

——農村社会における三つのケース・スタディの分析——

Thomas Schweizer and Douglas R. White (eds.),

Kinship, Networks and Exchange.

(Cambridge University Press, 1998)

ライカイ・ジョンボル

はじめに

親族関係、社会的ネットワークと社会的交換は、社会構造および日常生活において重要な部分をなしている。そのため、これらに関する研究は戦後の社会学と民族誌記述の主要な研究分野の一つになった。こうした研究はたんに理論的分析というにとどまらず、より実践的な研究であるといっても過言ではない。なぜなら現代世界では、社会成員間の対人関係（例えば、社会的ネットワーク、社会的交換等）は、個人化の進展や家族制度の衰弱等の結果、急速に新しい形をとりつつあるからだ。社会成員間の対人関係、個人の欲望、そして現実的な行動の特性は、当然ながら各々の社会によって異なる。多種多様な社会の親族関係、社会的ネットワークと交換の特性を分析することで、我々の社会が直面している問題もある程度解決できるようになるかもしれない。その対人関係は、社会の基礎として考えてもよい。対人関係が新しい形をとるのにしたがって、現代社会は将来解決すべき新たな社会的問題に直面するようになる。私の用語で現代社会の「柱」（つまり、基本単位）と呼ばれる家族—親族関係は、現代社会の対人関係で重要な役割を持っている。これらの変化を観察することは、きわめて重要な作業であると思われる。

親族、ネットワークと交換間の関係は、社会成員の社会的需要によって多種多様な社会でさまざまな形をとる。そうした交換は、基本的に二種の相互依存にもとづいていると思

われる。一つはネットワーク中の人々の経済的相互依存であり、もう一つは尊敬、名声などのような社会的目標をめざす非経済的相互依存である。前者の場合、その関係の特性はある程度、社会成員の経済的相互依存の形態と社会的背景（例えば、親族関係）によって規定されるものと思われる。一般的にいうと、経済的な相互依存が高い社会では、社会成員間の交換も多くなる。そのさい親族関係が強い社会では、社会的交換はおもに親族成員の間の方が多し。それに対して、親族関係が弱い社会では、その交換はおもに非親族である社会成員の間の方が多くなる。なぜならこの場合では、個人は自分の親族的な関係には頼りにくいように思われるからだ。個々人間でなされる社会的交換は、おもに社会成員間の関係を強化することをめざす。したがって、発展途上国では、経済的相互依存が高いために、社会成員間の交換がきわめて大切になる。しかし、先進国では、そうした経済的な相互依存は発展途上国ほど高くないので、こうした社会的交換は比較的になくなるということが考えられる。すなわち、個人化の強くなる可能性の方が高いのである。ここにおいて、個人化が進展し家族制度が衰弱している現代社会では、対人関係がいったいどのように変容しつつあるのかということを、我々の社会の将来に向けてできるだけ明らかにする必要があるように思われる。

1 新しい視点からみた親族関係と交換システムの分析

社会的ネットワークの研究は、あるネットワーク中の成員間の社会的関係および物資の流れに注目し、そのネットワークの成員が繰り返して起こす新たな社会的パターンについて検討するものである。本書中のそれぞれの研究は、親族関係と交換の特性を新たな視点から分析している。その分析は、旧来の構造機能主義的あるいは文化主義的仮定を離れて、民族誌的な本質と形式的方法を有効な仕方と組み合わせながら行われる。それにより、本書は親族関係と交換の研究を、社会的ネットワークの視点からよみがえらせるということをめざしている。

本書の中に入っている 14 のケース・スタディは四つに分類されている。編者である Thomas Schweizer と Douglas R. White は、その 14 のケース・スタディを次の五つの研究分野と立場に分類した。すなわち、一、親族と婚姻の関係；二、親族関係と交換を含める社会的行為の分析（すなわち、個人の社会的関係と行為間の関係）；三、交換の動的なアプローチ（静的なアプローチの代わりに）；四、ネットワークの研究に対しての時間的な変遷のアプローチ（そのうえ、「構造的かつ時間的な変遷」とネットワーク中の物資、成員の位置の地理的な異同との間の関係についての分析も必要である）；五、個人の行為や社会的関係

のネットワーク的な分析をより広くするために使われる「行為者」を基礎とする視点。

上述の五つの研究分野と立場について、私は次のコメントを与えたい。一つはネットワークと交換をめぐる動的なアプローチについてであり、もう一つは行為者を基礎とする視点からの分析に関してである。旧来のアプローチと比べて、これら二つのアプローチはより有効だと考えられる。あるネットワークと交換の様相を対象とする場合、静的なアプローチを利用する分析は、それをスナップ写真のような形でしかとらえることができない。それに対して、動的なアプローチを使った場合は、その静的な状態の時間的な変遷をも観察できるようになる。そのとき平面的なスナップ写真は、時間的な要素が加わることによって立体化されるようになる。社会変動が遅い社会の場合は、そうした動的なアプローチはあまり必要ではないが、社会変動が速い現代社会の親族関係、ネットワークと交換を研究対象とするなら、静的なアプローチより動的なアプローチの方が有効であるように思われる。

行為者を基礎とする視点からのアプローチにおいては、親族関係、ネットワークと交換の関係は、方法論的個人主義の立場から分析されている。Weber や Giddens のように、私は社会の諸現象をおもに個人の行為から説明する立場をとりたい。なぜなら社会構造、社会的関係などは、社会成員の行為によって形成されると思われるからだ。したがって、あるネットワークが出現した原因を理解するためには、そのネットワークで交換している成員の動機を明らかにすることが有効であると思われる。

2 14のケース・スタディの概要

本書の14のケース・スタディとそれらの四つの分類を次のように要約したい。

「親族関係の変動、物資の流れと経済的協力」と題された Part I は基本的に、新たな親族関係ネットワーク中の親族システムの分析に注目している。そこには四つの論文が含まれ、第一論文はアドリア海の小さい村における世帯類型の異同について検討し（著者 Bojka Milicic）、第二論文は「農業的なジャワ」の平民とエリートネットワークの形成を分析し（著者 Douglas R. White と Thomas Schweizer）、第三論文は Pul Eliya（スリランカ）における「地方的ルールと戦略以外の全体的な婚姻連合の形成」について説明し（著者 Michael Houseman と Douglas R. White）、第四論文は Eastern Flores（インドネシア）における婚姻連合の戦略および経済的生産と分配を分析している（著者 Robert H. Barnes）。

「親族関係の交換ネットワークの大型構造と其中的の個人」と題された Part II は、特定の親族関係と交換ネットワーク中の個人の状態について、Part I よりさらに深く検討してい

る。この部分には三つの論文が入っている。第一論文は、母系の Khashi（インドの西北）における都市記述を研究対象としている。著者である Monika Böck は、インフォーマントは自分の安寧と尊敬をめざす交換としての社会的行為をどのような仕方ですキーマ化するか、ということ进行分析している。第二論文は、北西ケニアの牧畜社会における論理的経済と、Pokot 遊牧民の環境的・経済的危険を避けるための保護戦略を検討している（著者 Michael Bollig）。第三論文は、アンデアン高地の遊牧民にみられる不作のリスクと市場不確実性を避けるための戦略を研究している（著者 Barbara Göbel）。

「婚姻、交換と連合」と題された Part III は、嫁資と婚姻交換について再考している。ここには三つの論文が入っている。第一論文は、婚姻時における財産移動に関する比較研究である（著者 Duran Bell）。Bell はここで次のような結論を下した。婚姻交換の場合は、財産移動は交換システム中の成員の間で行われているが、そうした財産移動は相続時における財産移動とは異なる。なぜなら相続する時に、財産だけではなく、その財産を持っている権利も移動されているからだ。第二論文は、西ヒマラヤ山脈社会における社会・経済的状态と嫁資との関係を研究対象としている（著者 Aparna Rao）。第三論文は東インドネシアのラランツカ市における貨幣と婚姻交換との関係を分析する。それによって、貨幣はたんなる支払手段というだけではなく、個人の社会的地位と関係に影響を与えるために使われる場合もあることが明らかとなる。すなわち、貨幣は交換手段としても機能するようになるわけである。（著者 Stefan Dietrich）。

「親族関係にもとづく交換システムの出現、発展と変遷」と題された Part IV は、その交換システムの変遷について、結合的なモデルおよび歴史的・記述的記録を使用して検討している。この部分には四つの論文が入っている。第一論文は、フィジー諸島の交換システムと王国の出現を歴史的に理解するために使われる「graph-theoretic minimum-spanning tree model」を紹介している（著者 Per Hage と Frank Harary）。第二論文は、地方的ルールにすぎないものから発展してゆく全体的な婚姻交換システムの形成について指摘している（著者 Franklin E. Tjon Sie Fat）。第三論文は、歴史的な記録を多数使用しながら、Papua New Guinea 山脈に住んでいる Enga 民族の茶儀式の交換サイクルを明らかにしている（著者 Polly Wiessner と Akii Tumu）。第四論文は Papua New Guinea の儀式的交換について、ゲーム理論的アプローチを使用して検討している（著者 Joachim Görlich）。

3 「親族関係からみた交換ネットワークとその構造の中の個人」の三つのケース・スタディ

以下では、Part IIに含まれる三つの文章について、より詳しく紹介することにした。というのも、ここに入っている論文の内容は私の研究テーマにもっとも近いからである。その三つの論文は、親族関係と交換システムとその中の個人との関係について、全く異なる視点から検討することで、さまざまな興味深い事実を明らかにしている。とりわけ、個人とネットワークと交換との関係の地域ごとの異同について、これらの論文から多くを知ることができる。そうした地域ごとの異同は、個人の経済的保証感といった社会的需要と、その社会的需要を実現する条件との関係に、その理由が求められるように思われる。

3-1 言葉で表現される文化的な交換システム

人類学は、文化的理想と現実的行為との関係を重要な研究分野としている。文化的な視点から見れば、Monika Böck はその二つの関係の略図を、いわゆるスキーマ理論 (schema theory) を通じて描くことで、親族関係に関する文化的なデータを新たな視点から説明している。Böck は「文化的な知識は我々の行為を形作り、限定しているのだが、それと同時に、文化的な知識の方も個人の特定の経験によって新しい形をとっている」ということを、本研究の立場としている。すなわち、文化的な知識と個人の行為とは、互いを形作るような影響関係にあるというわけである。そうした立場から、Böck はネットワーク中の個人の状態を、言葉で表現されている文化的要求と価値および個人の対人関係のネットワークを通じて分析している。

スキーマ理論は、文化的なメッセージの内面化に関する個人的な経験の役割を研究対象としている。それにより、対人関係と非公式的なネットワークの分析を通じて、いわゆる文化的なアプローチの可能な組合せを明らかにすることができる。Böck は次の二つの目標スキーマを区別する。一つは語義的レベルであり、もう一つは経験的レベルの目標スキーマである。語義的レベルの場合は、さまざまな文化的構築は社会的ネットワークの共通な要因を定義する。経験的なレベルとは、インフォーマントの対人関係ネットワーク中の状態の異同をいう。また、個人の経験による感情も高級のスキーマとして、内面化された文化的モデルの応用に重要な影響を与える。

Böck は、Khasi 地域 (インド) に住んでいる二人の女性にインタビューした。二人の親族関係ネットワーク中の地位と状態に応じた経験と感情の異同にしたがって、共通な文化的知識の応用の仕方も二人の間で異なっている。基本的に母系家族を基礎とする Khasi の

人々は、母系家族だけではなく父系家族をも大切にする。一人のインフォーマントの場合は、父系家族の方が強いために、彼女はとくに父の家族と良い関係を保とうとする。そのさい、父の家族に対し、彼女は言葉で表現される「祝福のための尊敬」(respect-for-blessing)というスキーマを応用する。「祝福のための尊敬」とは、父の家族に対し、言葉で表現される尊敬を表示して、父の家族からも言葉で表現される祝福を与えられるというスキーマである。そうしたスキーマを用いなければ、彼女と父の家族との関係が悪くなる場合、父の家族の祝福は「祝不幸」(curse)になってしまう。もう一人のインフォーマントの場合は、父の家族ではなく、母の家族の方が強いために、彼女は父の家族と良い関係を作ろうとして、上述の「祝福のための尊敬」というスキーマの応用をとくに重視するということはない。

Böck はこの二つのインタビューの結果を次のように要約している。二人のインフォーマントの文化的モデルは異なるわけではないけれども、親族関係ネットワーク中の地位と状態および個人的な経験の異同によって、その共通な文化的モデルの異なる要素が強調されるということである。

3-2 弱い親族関係にもとづく「モラル・エコノミー」システム

Michael Bollig は、北西ケニアに住んでいる Pokot 遊牧民の中で制度化されている「モラル・エコノミー」システムと、そのネットワーク中の個人との関係を研究対象としている。そのさい、Bollig は、「なぜ個々人は交換をするのか？」という方法論的個人主義にもとづく問いだけではなく、モラル・エコノミーの制度的基礎に関する「行為者は交換を促進するためにどういう制度を応用するのか？」という問いをも同じように大切だとみなしている。

Pokot 遊牧民が行っているモラル・エコノミーの目的は、たんに物資的資源の蓄積というだけではなく、個人の物資的な保証感を増大することにある。彼らは姻戚や家畜友達（つまり、家畜を交換している人々）といった社会的資本、および名声のような象徴的資本のために、家畜類などの“経済的品目”を頻繁に交換している。その交換を通じて、遊牧民は父系親族および近いまたは遠い姻戚と友達を、自分の対人関係ネットワークの中に取り入れるよう努力しているのである。このように、嫁資交換、嫁資分配と家畜友情を通じて、個々の行為者が家畜類交換によって互いに結ばれた特定のネットワークが出現する。天候などのために自分の家畜を失った場合、個々人はその交換システム中の人々から家畜を借りることができる。そのようにして借りた家畜は、返すべき負債になる。

また、一般的にいうと、遊牧民間の家畜交換は時間的に長いスパンをもつために、家畜

と他の有用な物の交換を続ける可能性が高くなる。それとともに、交換する人々の間の感情も同じように強くなる。家畜交換はライフ・サイクル、補償などのような場合にしばしば行われるが、それよりも嫁資交換、嫁資分配、家畜を媒介とする社会的友好関係などのような場合の方が多い。

上述のように、親族関係と友情関係とはいずれも、モラル・エコノミーの土台となっている。したがって、何らかのストレスをこうむった時に、親族関係そのもの（すなわち、家畜交換がない親族関係）だけではサポートを保障することができない。さらに、個々人は広い交換システムを持っているのにもかかわらず、天候などのために家畜を失うといった厳しい状況をこうむる時に、必要なサポートをいったい誰から（親族か家畜友達）与えられるのかということは常に不確定的である。しかし、物質的な保証感を支える他の方法がないので、道徳的経済が行なわれるしかない。このような理由によって、家畜類は遊牧民の間で経済的品目として、モラル・エコノミーという交換システムの下で使用されているのである。

3-3 強い親族関係にもとづく経済的なネットワーク

Barbara Göbel は、北西アルゼンチンに住んでいる遊牧民の間にみられる、経済的困難を避けるために作られた一種の親族関係のようなネットワークの特性を検討している。そのさい、Göbel は Bollig と同じように環境的条件に注目しながら、次の二つのリスクを区別している。一つは生態的かつ経済的条件の変動としての危険であり、もう一つは情報の不足による市場の不確実性である。個人は前者に関しては影響を与える力がないけれども、後者については常にもっとも新しい情報を求めることによって、その条件をよくすることができる。そうすることで、多くの場合、個人の社会的関係もまた新しく形作られることになる。決定理論の視点を通じて、Göbel は危険と不確実性を避けるために使用されている、さまざまな経済的メカニズムと対人関係ネットワークに注目している。遊牧民は有用な物とぜいたく品を手に入れるために、羊毛、肉や牛乳などのような畜産品を交換している。その場合、彼らは大幅に地域間の貿易に依存した方が有利となる。しかし、地域的な距離のせいで、遊牧民は市場に関する新しい情報を入手しにくい。

北西アルゼンチンの遊牧民は互いによく協力し合っているが、その協力は、実際に近い親族あるいはいわゆる *compadrazgo* 関係（スペイン語の *compadre* は英語で *godfather* の意味）を通じて結ばれている人々の間に限られている。*Compadrazgo* 関係とは、洗礼、最初の理髪（三、四歳ぐらいの時）、堅信礼（十一と十三歳の間）や結婚のような場合に作られる一種の親族関係であり、それは一生続く関係となる。その *compadrazgo* 関係を通じて、

個人は互いにやりとりを行う広範囲のネットワークを持つようになる。それにより、個人は畜産品だけではなく、経済的交換に対しても、その *compadrazgo* 関係に大幅に依存することができる。そうした関係を作る時に、贈物がしばしば交換されるが、それは道徳的義務としての精神的支援の維持をも保障している。一般的にいうと、そうした関係の成員は近い親族と親しい友達からなっている。そうしたネットワークは、情報を探す時に有利にはたらし、また運送費が安くてすむなどの利点を持っている。

おわりに

私は先述の三つのケース・スタディを、次のように整理したい。

まず、Böck の例では、言葉で表現される「祝福のための尊敬」という交換システムが生じたのは、物質的な利益ではなく、一種の社会的な目標を達成するためであった。その社会的目標とは、ネットワーク中の成員間の社会的関係を“強く”することである。その交換システムはまた、北東インドの特定の文化的背景にもとづいたものであり、そのなかでは、言葉で表現される「祝福」を受けとるために、言葉で表現される「尊敬」が必要となる。そうしないと、「祝福」は「祝不幸」となってしまう。すなわち、その社会的な目標は、「祝福」を受けとり、「祝不幸」を避けるための文化的な保証感を達成することにある。そのために、Böck の例での交換システムはもっぱら非経済的な需要にしたがって出現したのである。

それと違って、Bollig と Göbel のケース・スタディでは、「家畜交換」と *compadrazgo* 関係による「相互の援助」の交換システムは、おもに、物質的な保証感を達成するために形成されたものであると思われる。その物質的な保証感は具体的には、Bollig の例では、Pokot 遊牧民が厳しい状況をこうむった時に必要なサポートを受けるということによって、また Göbel の例では、北西アルゼンチンの遊牧民が不作のリスクと市場不確実性を避けるために作ったネットワークによって、支えられている。つまり、先述の交換システムのいずれも、経済的な背景にもとづいているのである。ということは、もし経済的な不確実性がなければ、両者は出現しないのではないかと思われる。したがって、その二つの交換システムは経済的な需要によるネットワークだということができる。さらに、Bollig の例にある「家畜交換」のシステムは、名声のような象徴的な資本をも目指すけれども、それは「家畜交換」システムの副次的な機能にすぎないものと考えられる。なぜなら、先述のように、この交換システムはこうした社会的な目標ではなく、経済的な不確実性を背景として出現したからである。そのさい、広い「家畜交換」のシステムを持った場合は、厳しい状況を

こうむる時にサポートをもらう可能性が高くなるから、名声も高くなるわけである。

なお、「家畜交換」のシステムと *compadrazgo* 関係によるネットワークのいずれも、経済的な不確実性を背景として出現したのだが、その二つの間には重要なずれが見られる。つまり、Bollig の例では、厳しい状況をこうむった時に、個々人は親族関係そのものよりも「家畜交換」のシステムの方に依存しようとする。なぜなら、Pokot 遊牧民の親族関係それ自体は十分強くないので、「家畜交換」のシステムに入っている人々からサポートを受ける可能性の方が高いからだ。それと違って、北西アルゼンチンの遊牧民の場合は、親族関係が Pokot 遊牧民よりずっと強いために、彼らは親族関係にもとづく交換システムを創造することで、経済的な不確実性に対処しようとする。これは、二つの交換システムの間にみられる重要な差異である。その差異は、Pokot 遊牧民と北西アルゼンチンの遊牧民との間にある、文化的なずれに由来するものと考えられる。そうであるなら、二つの交換システムはいずれも経済的な不確実性を背景として出現したのだが、それらのネットワークの特性は、各々の文化的な背景の差異によって異なるということになる。このことは、重要な結論であると思われる。

また、もう一つの重要な結論を下したい。つまり、経済的な不確実性あるいは相互依存にもとづく交換システムについては、村落や遊牧社会のような人口の少ない集団 (Bollig と Göbel のケース・スタディ) の場合の方が出現する可能性が高い一方で、物質的な利益ではなく、文化的背景にもとづく交換システムについては、都市の人々 (Böck のケース・スタディ; Böck のインフォーマントは都市に住んでいる) の間の方が、出現する可能性が高いということが考えられる。なぜなら、遊牧民や村の人々と違って、都市の人々にとっては、物質的な保証感よりも文化的背景によって異なる対人関係のほうが重要である可能性が高いからだ。

最後に、本書に入っている 14 のケース・スタディは、親族関係、ネットワークと交換との間の関係をさまざまな視点 (親族と婚姻、個人のネットワーク中の地位と状態など) から、新しい方法 (動的アプローチ) を通じて検討しているのだが、残念ながら本書には先進国における研究が入っていない。急速に変化しつつある先進国の親族関係、ネットワークと交換に関する研究も含んでいたなら、本書の価値はより高くなっていただろうと思われる。

(ライカイ ジョンボル・修士課程)